



うな「手前勝手」な脱線があったりもした（山野先生すみませんでした）。もちろんそれ自体は誉められたことではない。しかし現在の私がもし当時から少しでも成長しているのであれば、そのような脱線をきつく詰るわけでもなく、ヨタヨタとおぼつかない足取りで歩いていて私達を暖かく見守ってくださった、先生方や先輩方のおかげに他ならない。

私は卒論・修論で北海道の防風林のことを扱った。今、地理学教室の資料室に他の方々の卒論や修論とともに並んでいるのを見ても、自分で言うのも何であるが、やはり異色である。何しろイイ加減な性格が災いして、勉強量も少なく、その点でも指導していただいた先生方に多大なる迷惑を掛けた（この場をお借りして改めてお詫び申し上げます。謝ってばかりですが）。そのうえこの一風変わった卒論・修論である。結局最後まで脱線していたのかな、とフト考えてしまう。しかしながらこんなロクでもない学生（院生もやっていました。申し訳ありません）が存在し得るとは、何と懐の広い学科であろうか。他にも例を挙げればキリがないほど、この懐の広さに救われることが多かったように思う。

私は現在高等学校の社会科教師をしており、人数や専門性の関係で地理以外の授業をしておられる先生方も多いなか、幸いにして今でも毎日が「地理」との格闘の日々である。などと言うのは大げさで、日々これ研究に励んでおられる方々に申し訳ないので、「じゃれあっている日々」と訂正しておく。これほど楽しいことはないと思っっている。しかしその一方で16~18歳の若い人間を「教育」という、考えてみれば大変な役割の端くれをも担っているのである。真面目に考えるとあまりの責任の重大さに愕然としてしまうが、今まで特に強い苦情を受けることもなく、なんとかやってこれているのは、それなりに動まっているからなのかもしれない。もしかすると全く相手にされていないのかもしれないが、

とりあえず他人の評判は横へ置いておいて、あくまで自分自身のという観点から見ると、このような日々を送る中で「アソビの感覚」が非常に重要なのではないかと思うようになってきた。特に現在勤務しているような、いわゆる「進学校」でこそ、重要ではないかと感じている。ただしこの場合の「アソビ」は「遊び=play」ではない。車を運転する方にはわかっていると思うが、ハンドルやアクセル、ブレーキにある「作動するまでのラグ」を表すあの「アソビ」である。よい言い方をすれば、「余裕」のようなものである。そしてこの「アソビ」の感覚は、私の場合「懐の広い」地理学教室に所属することによって培われたような気がするのである。そしてこの感覚はどのような職業につき、どのような生活を送っていても、かならず役に立つものではないか（他の生活をしたことがないので、断言するのは少々コワイ気もするが）と思うのである。

私ごときが地理学教室に意見するなど、10年早いどころか永久にそんな資格はないのかもしれないが、ぜひとも学生の自由を重んじる学風は残して欲しいと思うのである。

一步まちがうと、私のようなロクでもないのばかりが輩出されるかもしれないが。そのようなリスクを負いつつもやはり、地理学教室はやはり地理学教室であってほしいのである。特に最近の高校生を見ていると、自由を手前勝手と取り違えているのが普通の状態になりつつあるので、教室の先生方のご苦労は非常によくわかるのであるが、

最後に、毎日お亡くなりになった服部先生に深く深く感謝するとともに、ご冥福をお祈りいたします。

（昭和62年卒業・平成元年修了）